

RICHARD MILLE SUZUKA Sound of ENGINE 2018 Masters Historic Formula Oneレース 出場マシン第3弾 決定のご案内

2018年11月17日（土）・18日（日）に鈴鹿サーキット（三重県鈴鹿市）で「RICHARD MILLE SUZUKA Sound of ENGINE 2018」を開催いたします。

本イベント内で行われ、東アジア初となる注目イベント「Masters Historic Formula One」公式レースの、出場マシン第3弾として、1976年～1980年までのF1マシン7台が決定いたしました。

「Masters Historic Formula One」レースには、今回発表するマシンを含む約20台のマシンが出場予定で、その他の出場マシンは決定次第ご案内いたします。

Masters Historic Formula Oneレース 出場マシン Vol.3

1976 March 761 [Fittipaldi Class]

＜解説＞ F2との共用化を進めてきたマーチの76年用モデル。比較的評判の良かった前年の751のロングホイールベース版といえるもので、ワークスからビットリオ・ブランビラ、レッタ・ロンバルディ、ハンス＝ヨアヒム・シュトゥック、ロニー・ピーターソンの4台体制で参戦したほか、アルトゥリオ・メルザリオもプライベートとしてエントリー。ピーターソンがオーストリアGPでポールポジション獲得、イタリアGPで優勝を果たすなど、直線スピードを活かした高い戦闘力を示した。SUZUKA Sound of ENGINE初見参のヘンリー・フレッチャーの761は元シュトゥック車。



1977 LEC CRP1 [Fittipaldi Class]

＜解説＞ マーチやトークンでドライバーとして活動していたデイヴィッド・パーレイが、父親の経営する冷蔵機器メーカーLECの支援を得て設立したコンストラクター。CRP1はマイク・ピルビームのデザインで設計されたオリジナルマシンで、“CRP”は父親のイニシャルに由来する。第7戦ベルギーから参戦を開始するも第10戦イギリスのブラクティスでF1史に残る大クラッシュを起こし撤退。179.8Gの衝撃から奇跡的に生還したパーレイは、“最も大きい重力に耐えた人間”としてギネス認定された。現オーナーはマスターズ代表のロン・メイドン。



1977 Lotus 78 [Head Class]

＜解説＞ 上下逆向きのウイング状としたサイドポンツーンをサイドウォールとスカートで密封することで強大なダウンフォースを得たグラウンドエフェクトF1の先駆的存在。エースのマリオ・アンドレッティが6勝、ナンバー2のグンナー・ニルソンも地元ベルギーで生涯唯一の優勝を飾るなど、圧倒的な速さを誇った。JPS-18と呼ばれたシャシーナンバー4は、ニルソンのレースカーとしてドイツGP以降のシーズン後半戦で活躍。翌年癌で他界するニルソン最後のレースとなった77年のF1日本GPでは、赤いインペリアル・カラーに塗られ話題となった。



1979 Ensign MN179 [Head Class]

＜解説＞今年の7月に亡くなった、元レーシングドライバーのモーリス・ナン率いるエンサイン・チーム初のグラウンドエフェクト・マシン。シャハブ・アーメドのデザインによるシャシーは、フロントカウルにラジエーターとオイルクーラーを配する特異なスタイルでデビュー。その後、第4戦ロングビーチからオーソドックスなスタイルに大改修されるも、イギリスGPでパトリック・ガイヤールが13位でゴールした以外すべて予選落ちカリタイヤに終わっている。ポール・タッタソールのN179は後期型のシャシーナンバーMN10で、公式戦の出走歴はない。



1979 Ferrari 312 T4 [Head Class]

＜解説＞80度V型12気筒“ボクサー”ユニットを搭載した312シリーズ初のグラウンドエフェクト・マシンとして79年の第3戦、南アフリカGPでデビュー。ダニー・ベーカークの所有するシャシーナンバー037は、その南アフリカでジル・ヴィルヌーブがドライブして優勝、続く西アメリカGP（ロングビーチ）でも優勝を飾った由緒ある個体である。この年のフェラーリはジョディ・シクター、ヴィルヌーブともに3勝ずつを挙げる圧倒的な強さを見せ、シクターが初のワールドチャンピオン、チームもコンストラクターズ・タイトルに輝いている。



1979 Shadow DN9 [Head Class]

＜解説＞コピーマシン問題でアロウスと裁判沙汰になったことで知られるDN9の発展型。特徴的な形状のサイドポンツーンを廃し、オーソドックスなウイングカー形状のサイドポンツーンを採用したシャドウ初のグラウンドエフェクトカーでもある。新人エリオ・デ・アンジェリスとヤン・ラマースの2台体制で参戦するもシャシー剛性の不足とダウンフォース不足に悩まされ成績は低迷。チャールズ・ワナーのドライブするDN9-1Bは、最終戦ワトキンスグレンで4位に入ったデ・アンジェリス車で、サムソン・シャグ・タバコのライオンの絵柄が印象。



1980 Brabham BT49 [Head Class]

＜解説＞BT48のアルファ・ロメオV12をコスワースDFVに載せ替え、79年の第14戦カナダGPに登場したBT49。シャシーは部分的にカーボンで補強したアルミ・モノコックで、ギヤボックスはアルファ・ロメオ製ケースにヒューランドFG400を組み合わせたもの。BT49Cはスライディングスカートに禁を受けハイドロニューマティック・サスを搭載した81年仕様で、ネルソン・ピケが3勝を挙げ初のドライバーズ・タイトルを獲得。ホアキン・フォルチのBT49-10は、非選手権の南アフリカGPでピケが2位に入った後、テストカーとして使われた1台だ。



RICHARD MILLE SUZUKA Sound of ENGINEとは

1962年に日本初の本格的な国際レーシングコースとして開場した鈴鹿サーキットは、2012年に50周年を迎え、次の50年に向け新たなスタートをきりました。鈴鹿サーキットは、この歴史的価値を絶やすことなく維持し続けるために、モータースポーツが持つ貴重な歴史にスポットライトを当てた本ヒストリックイベントを、2015年より開催しています。

なお、本イベントの前売チケット（大人1日券：2,500円、2日券：3,500円）は、9月23日（日・祝）より販売いたします。

Masters Historic Formula Oneとは

3リッターエンジンを搭載し、1966年から1985年に製造されたF1マシンを使用するMasters Historic Formula Oneは、グラウンドエフェクトの有無、年式などによって四つのクラスに分けられ、ヨーロッパ内でシリーズ戦が行われています。2017年の「RICHARD MILLE SUZUKA Sound of ENGINE 2017」では、同時に11台のヒストリックF1マシンがデモンストレーションを行いました。